

本興寺だより

令和四年
十月
第三八号

「蔵(くら)の財(たから)よりも身の財勝れたり身の財よりも心の財第一なり」(宗祖 崇峻天皇御書) 山々が、少しずつ秋の装いを始めてきました。江戸時代の俳人、小林一茶の句に「はづかしや おれが心と秋の空」とあります。もともとは「男心と秋の空」でしたが、明治以降「女心と秋の空」が多く使われています。変わりやすい秋の天気と移り気な人の心は男も女も同様です。秋は心の飽きにも通じる掛詞でもあります。

人の心は正に車輪のように、何時も回転し続け、絶えず何かの悩みを引きずり、静かに停止していることはまれであります。移り気で飽きやすい心であっても、「自分の行いと考えは絶対正しい」という信念だけは変えない人が多いのです。

仏様は、この自信過剰な信念が、往々にして己を苦しめ運命を狂わせると云われます。先月は国葬が二つありました。イギリスのエリザベス女王は厳粛に行われました。日本の安倍元首相は、賛否両論の渦巻く中で行われました。複数の政治家が、SNSで国葬の招待状まで見せて、「私は欠席してやるぞ!」と自慢げに宣言し、在京の外国のある駐日大



使から、日本の国会議員の品位のなさを指摘されたことは恥ずかしいことです。これが一般人で知人の葬儀の案内が来て、同じことをしたらその人は誰からも相手にされません。

冠(成人式や人生の節目の祝いの儀式) 婚(結婚葬(葬儀) 祭(祖先の祭祀) は皆一生の大事な節目であり、厳粛なものなのです。昔の集落には、お互いに協力する十の掟がありました。嫌いな人には八つは協力しなかったのが「村八分」の言葉ですが、例えばどんな人でも、火事と葬儀の二つだけは別。必ず協力しました。特に葬儀は人生を終える儀式です。好き嫌いの感情を超えて静かにお見送りをしたものです。

如何なる形態であれ、賛否はあっても、葬儀は出席したければ黙って出席する。欠席したければ黙って欠席すればよいのです。騒いで同調を求めるものではないのです。

人は何時でも自分の考えと行動は正しいと思っているのです。他人との意見の相違や風当たりがあっても、なかなか己を修正できないのです。

また日頃の生活では、経済的な安心のために蔵の財(財産)に関心が向いており、心の財(己の心の持ち方が如何に大事か)に関心もなく、また健康が当たり前と思つて、身の財にも感謝が薄いのです。

しかし身体を壊すと、健康の有難さが蔵の財(お金)に変えられない大事なものであることに気付きます。

人生で何度も経験する困難や苦悩に出くわす時、また避けられない老いと病気に見まわれた時、人は初めて正面から自身と向き合うことになると思われまふ。それらを克服して生きようとする時、自身の今までの生き方、考え方、行いを冷静に見つめ直すことが出来た時、本当の宝は心の中にあることに気付けるのだと云われます。

苦悩を乗り越えて進む力と智慧は、仏様が私達の中に埋め込まれているのだといわれます。

法華経如来寿量品第十六には、「諸のあらゆる功德を修し 柔和にして質直(素直で正直)な人は、則ち皆我が身 此にあって法を説くと見る」とあります。

神仏が何時も我が身のそばにおられて、私達を教え導いておられるといわれるのに、人は決して望んでいない結果が眼前に現れ、苦悩が絶えないのは何故か? それは頑なな自信、妥協できない信念が、己を振り返る柔和で質直な気持ちの芽を摘んでいるからです。

我が身に起るあらゆる出来事は全て、自分の心の浄化と成長のためには必要なことなのだ。例え悪業の因縁によつてもたらされた報いであつたとしても、その辛さを通して己の本性である神仏の子に立ち還るための大事な体験になるのだと知ることが大切であると説かれています。

人生におけるマイナスの出来事は、全て自分の心の闇を引き寄せていると云われます。

必要以上に欲しいものに執着する貪り(むさぼり)の心、腹を立て怒る心、自分のことしか目に入らず他

人と比較して悩む愚痴の心、被害者意識等が心の闇を作り出していると思われまふ。人は己の心の闇が無意識に生き方を決定づけているのに気付けないのです。その心の闇は神仏の教えに照らして己の心に光を当てて始めて気付くことが出来、除くことが出来るのだと云われます。

人に自分を理解してもらいたいと望んでいるのに理解してもらえない。人から愛されたいと願っているのに愛されないのは、自身の心の中に人の愛を拒否したり否定する想いがひそんでいると云われまふ。



私達が己の心の闇に眼を向けることは容易ではないのです。それは自分自身があるままの自分を知ることが嫌い、恐れているからだと思われまふ。

しかし見たくない自分、触れたくない自分を、神仏の教えを実践してその光で己の心の闇を照らし出した時、心の奥が無意識の自分がわかり、今自分が置かれている境遇がなぜこうなのかがわかるということ。

心は順風より逆境の中で、より磨かれ鍛えられます。己の貪欲と傲慢が作り出した闇の中で苦悩することが、神仏の光明に至る道なのです。光と闇が交差するこの世こそ私達の心が磨かれる道場であると示されています。どんな時でも心に宝石のように小さな光を輝かせて、闇(苦悩)を明るく照らして生きることが大事なのです。